

様式第2号（第8条関係）

平成30年11月29日

白老町議会
議長 山本 浩平 様

白老町議会議員 森 哲也 印

派遣成果報告書

日時（期間）	自 平成30年11月 5日（月） 至 平成30年11月 8日（木） 3泊4日
目的地	大分県竹田市、豊後高田市
調査事項	将来を見据えた観光振興の取り組みについて
視察の成果 （具体的に）	別紙のとおり報告いたします。

※ 必要の都度、写真その他を付加して、研修効果が現れる工夫をする。

1・竹田市の状況

・竹田市では大きくわけて6つの課題を抱えている。

- ※1 生活利便施設の減少・・・人口減少により利用者が減り、身近な店舗や病院等が閉鎖するなど、生活が不便になっている。
- ※2 交流機会の減少・・・住民はにぎやかな他の町に流出し、観光客も他の観光地に行くなど、交流機会が減少している。
- ※3 公共施設の老朽化、財政負担の増大・・・居住人口の減少や観光産業の停滞が地域経済を低迷させ、都市経営コストを増大させている
- ※4 地域コミュニティの希薄化・・・地域活動の担い手がいなくなり、イベント時も閑散とするなど、地域の繋がりが弱くなってきている。
- ※5 空き屋・空地の増加・・・空き屋や空き地が増加をし、居住環境やまち並みが悪化してきている
- ※6 就業機会の減少・・・企業等の撤退・廃業により、若者の働く場所が少なくなっている。

2・課題解決への取り組み

・竹田市は課題解決の為に4つの基本方針がある

※1 城下町の風情を活かした観光拠点づくり

・城下町としての特色を活かし、城下町の風情と魅力づくりを住民や商業者、行政がいったいとなって取組み観光拠点づくりを進める。

・中心市街地までの交通案内や駐車場の配置などを戦力的に行い、観光客が中心市街地にアクセスしやすい交通環境を整える。

※2 市民が日常的に利用できる中心市街地づくり

・都市機能が集積する場所として、市民が日常的に利用できる親しみやすい身近な中心市街地づくりを進める。

・中心市街地に商業・業務施設や公共公益施設を集積させることで、中心市街地の利用機会の向上に努める。

※3 歩いて楽しいにぎわい商業地づくり

・買い物や施設利用に限らず、余暇や散策にも利用できる回遊性のある商業地を形成し、様々な用途に対応できる空間づくりを進める。

・城下町の風情を残す中心商業地への進入車両の抑制を図る事で、歩行者の安全確保に努め、安心して快適に散策できる道路環境とにぎわいのある商業地づくりを進める。

※4 安心して快適に生活できる居住地づくり

・生活に必要な各種サービス施設が充実し、利便性の高い安心して生活できる居住空間を提供する事でまちなかでの快適な居住地づくりを進める。

・中心市街地は、若年層世代に限らず、高齢夫婦や若者の単身者なども含め、幅広い世代の居住が見込める場所であることから、土地の高度利用の推進に努め、共同住宅の整備を推進する。

3. 成果報告

・竹田市が抱える課題は白老町の抱えている課題と共通している事が多い。その中でも特に私が着目したのは『公共施設のあり方』である。

実際に竹田市の中心市街地を見渡す多くの新しく建築された公共施設が多々見られた。竹田市都市再生まちづくり基本計画によると、1、岡城跡保存整備 2、定住促進住宅整備 3、道路美装化整備 4、新図書館整備 5、まちの駅整備 6、歴史文化交流センター整備 7、竹田荘公園整備 8、総合文化ホール整備 9、児童公園整備 10、こども診療所整備 11、電線類無電柱化計画・街路灯整備 12、観光案内版整備 13、滝廉太郎記念館整備 14 稲葉川やすらぎ公園整備 等の多くの計画があり新築されていた。

実際に竹田市ではこれだけ多くの公共施設が建築される事から、様々な意見があったと聞いたが私が特に考えさせられたのは公共施設の建設場所についてである。

生活に必要な各種サービス施設が充実しているが、各公共施設の場所は離れた場所に建築されている。実際に、施設が複数近隣に並ぶ・複合施設の方が利便性を高く感じるし、そのような意見が多数あったと聞いた。

しかし、町内の回遊性の向上の為に一つ一つ離れた箇所に建築されている。実際に図書館を視察したが、広く開放感があり来場者が市外からも多く訪れる場所となっていた。図書館の場所は商店街の近くに建築されており、図書館に行くのに多くの方が商店街付近を通る事になるのを目の当たりにして、回遊性の考えが深まった。

また、以前は文化ホールのあった場所が九州北部豪雨による水害で被災した。その翌年に取り壊しが決まり現在地に新築する事になった。被災した場所に建築される事に多くの反対意見もあったと聞いたが、『移転はこの地域を見捨てる事になる』との考えから同じ場所に建築された。この言葉は特に印象深く残った。

他にも竹田市のまちづくりとしてデザイン性の高い温泉施設や温泉利用型健康増進施設等の施設は当初住民から反対意見もあったと聞くが、完成されていたデザインは日本だけでなく世界に通用する個性的な温泉づくりを本気で取り組んでいる姿を私は感じました。白老町でも公共施設の老朽化が著しい、今後の公共施設のあり方を今回の視察の経験を活かして考えたい。

また民間から竹田市の活性化の為に故郷愛で地元の活性化に挑戦している居酒屋がある。氏田善宣氏が経営する居酒屋『陽はまたのぼる』である。

当初、福岡での居酒屋出店を計画していたが地元である竹田市の人口減少・少子高齢化・若者の人口都市集中・働き手不足等の現状を目の当たりにして、計画をしていた福岡ではなく、地元を愛する思いから急遽竹田市への出店を変更した居酒屋である。

氏田氏の熱意ある講演から民間から地域が抱える課題を解決しようとする本気の姿勢を目の当たりにして、今後の地域の活性化に対する考えが深まった。

1. 取り組みの経過

旧豊後高田市の商店街は市内の中心を流れる桂川によって二分され、西側に6商店街、東側に2商店街があり、それぞれが地域商業の核として支えてきた。しかし、近年の大型店の進出や過疎化による後継者不足、さらには加速する時代の潮流に乗り切れずいずれの商店街も衰退の道をたどっていた。

特に、取り組み当初、事業を行った4商店街については、以前はその周辺にスーパーや銀行が立ち並んでいたが、スーパーは撤退し、銀行は移転をしたため、人通りの減少に追い打ちをかけ、廃業する商店も出始めた。

こうした中、商店街では祭りに行事に同調した売り出しやイベント、定期的な朝市の開催などの活性化策を図っていたが、集客経過は厳しい状況だった。

このような状況を打破する為に平成17年に『まちづくり会社設立準備室』が開設され、同年に『豊後高田市観光まちづくり株式会社』が設立された。

2. まちづくり会社の事業内容

- ① 『昭和の町』・ロマン蔵の魅力である「懐かしさ」にこだわったイベント実施による集客力の向上
- ② 東九州自動車道全面開通に伴う戦略的誘客活動の展開
- ③ 近隣市との連携による『六郷満山開山1300年事業』等を活かした『国東半島観光』への誘客促進や日本版DMOを目指す豊の国千年ロマン観光圏との連携による滞在型観光の促進による誘客
- ④ 山・里・海・温泉・食 等の市内観光資源との連携強化による相乗的な集客力の向上
- ⑤ 地域特産品の開発による観光消費額の増進とアンテナショップ等を最大限に活用した販路拡大の促進
- ⑥ 体験型観光コンテンツの開発強化と旅行業2種を生かした着地型旅行商品の企画・造成・販売の強化
- ⑦ 外国人観光客の誘客に向けた営業活動や情報発信及び受入体制の強化

3. 視察を通じての感想

豊後高田市の『昭和の町づくり』は平成13年は7店舗からスタートしたが、現在の昭和の町認定店は47店舗になっており、全国的にも脚光を浴び、年間40万人もの来訪者を迎える商店街になっていた。

ボランティアガイドの案内で昭和の町を歩くと、とても印象的だったのはガイドの方やお店の方の笑顔でおもてなしをする姿に働いている人たち自身が『昭和の町』が好きなど感じさせられた。その姿から、まちづくり会社のあり方を考えさせられた。